

## 竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介

—— 和歌を主題とする組香（四） ——

本稿は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介―和歌を主題とする組香（一）―（『社会科学』第46巻第3号、二〇一六年一月）、〔同一同（二）〕（『社会科学』第46巻第4号、二〇一七年二月）、〔同一同（三）〕（『社会科学』第47巻第1号、二〇一七年五月）に引き続き、竹幽文庫蔵『香道籬之菊』所載の組香について、とくに和歌を主題とする組香を対象に、翻刻と考察をおこなうものである。本稿では、楽の巻から、皐月香・大井川香・外山路香・新六歌仙香、また、射の巻から、深山香、宇治拾遺香の、計六つの組香を取り上げる。資料に関わる基本的な説明は、『資料』竹幽文庫蔵『香道籬之菊』の紹介（『社会科学』第46巻第2号、二〇一六年八月）を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、前掲『社会科学』第46巻第3号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

### 凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名とともに

矢野 環  
福田 智子

通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「朱」と示し、一面の終わりには、〴〵を付して丁数を記す。考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）和歌作品との関わり、というふたつの観点を設ける。

一、（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「\*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第46巻第3号）を参照されたい。

一、（2）で引用する和歌作品の本文は、特に断らない限り『新編国歌大観』Ver.2（角川書店、二〇〇三年）に拠る。

一、巻末には影印を付す。

《樂卷一四九》皐月香

【翻刻】

△(朱) 皐月香

中和門院

五月雨は時雨春雨夕立のけしきを空につくしてそ見る  
此哥を以て五月雨香を綴直したる組香也。

一 試なし。

一 名乗紙にて聞べし。

一 一二三の香、各二包充、都合六包の内、五包出香とし、<sup>樂</sup>九二ウ皆焚終て包紙を開くべし。

九二ウ皆焚終て包紙を開くべし。

一 出香六包を<sup>左三</sup>と分て三包充、両方にて打交へ、右の内よ

り二包取除け、残一包を左三包に加へ、四包を能く交へ出

香とし、皆焚終て後に除たる二包の内より一包取て、又焚

出す<sup>箱一</sup>包べし。

一 初四包は無試十炷香のごとく聞て、名乗紙に出香を聞の通、

認て出す。其後の一包を聞て、初四包の内<sup>樂九二オ</sup>何番目

に出たる香と同香成るを聞分て、名目を書附出す也。

一番目 同香(朱) 五月雨 二番目 同香(朱) 時雨

三番目 同香(朱) 春雨 四番目 同香(朱) 夕立

一 記録点は、独聞二点、二人より一点充也。後の香は点なし。

名目を認る左のごとし。

へ(朱) 褒美の詞、朱にて認る。<sup>樂九二ウ</sup>

五月雨中(朱) ほと、きす 時雨中(朱) 擣衣<sup>キヌタ</sup>

春雨中(朱) 花の香<sup>カ</sup> 夕立中(朱) 薫風<sup>カホリカセ</sup>

へ(朱) 過怠の詞、墨にて認る。

五月雨外(朱) しくれの雨 時雨外(朱) 木葉降

春雨外(朱) 私語<sup>サ、メゴト</sup> 夕立外(朱) 烈敷<sup>ヒツシキ</sup>

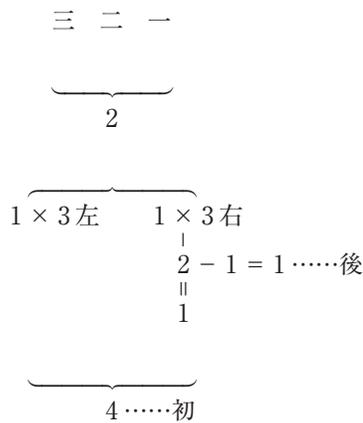
記録認様次に顕す。<sup>樂九三オ</sup>

皐月香之記 三除(朱)

〔表〕<sup>樂九三ウ</sup>

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「一」「二」「三」の香(試香なし)、各二包計六包

のうち、一包を除き、残り五包を用いる。すなわち、「一」「二」「三」の香各一包計三包を一組として、右左の二つの組を作る。そして、右の組の一包を左の組に加え、左の四包を初段として出香<sup>\*</sup>する。すべて焼き終わってから、後段として、右の組の二包から一包を焚く。残り一包は用いない。

答えは、名乗紙に記す。初段は、無試十炷香のように、出香の順に香の種類を「一」「二」「三」と書いていく。また、後段は、初段の何番目に出た香と同香であるかを聞き分け、一番目の場合から順に、「五月雨」「時雨」「春雨」「夕立」という聞きの名目に置き換えて答える。

一点は、初段では独り聞き二点、二人以上は一点とする。後段には点はなく、聞きの名目「五月雨」「時雨」「春雨」「夕立」に対し、聞き当てた場合は、それぞれ「ほと、きす」「擣衣」「花の香」「薫風」、聞き違えた場合は、「しくれの雨」「木葉降」「私語」「烈敷」という名目を記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭の歌の作者、中和門院とは、近衛前子「天正三年（一五七五）生く寛永七年（一六三〇）没」のことである。近衛前久の三女で、豊臣秀吉の養女として入内、後陽成天皇の女御となった。後水尾天皇、近衛信尋らの母でもある。

この中和門院の歌は、『新編国歌大観』には見えないが、本伝書では、五月雨香（射巻一四。次号掲載予定。）にも用いられる。ただし、第二句に本文異同があり、皐月香で「春雨」とある箇所が、五月雨香では「村雨」になっている。なお、武者小路実陰の口述を似雲が筆記した『詞林拾葉』には、「五月雨は時雨夕立おりおりのけしきをそらに尽してぞふる」（『近世歌学集成』中、三二五頁八行目）という歌を見出す。すなわち、享保五年（一七二〇）五月十八日夜の口述の中で、道堅（室町期歌人。享禄五年（一五三三）没。）は、「随分聞き、たるはたらきすきたる風」の「よみて（詠み手）」であるとされ、その一例として引かれるのである。ともあれ、本伝書の成立以前に、少なくとも当該歌に酷似した歌が存在していたことがわかる。

○「五月雨」「ほと、きす」

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 紀ともものり

五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ

『古今集』卷第三夏歌、一五三番

○「時雨」「擣衣」

秋百首

夜やさむき時雨にきほふ雁がねに衣うつなり山のべのいほ

『後鳥羽院御集』 八三六番

○「春雨」「花の香」

春曙

山風も花の香ながら真木の戸をおして春雨曙の空

『草根集』 八九七番

○「夕立」「薫風」

(首夏風)

名にしおふ山は青葉に吹初めて花にはあらぬ風かをるなり

『新明題和歌集』 一一四九番

○「五月雨」「しくれの雨」

夏歌とて

秋の色は時雨にあへぬ神なびの山もつれなき五月雨の空

『壬二集』 二二五九番

○「時雨」「木葉降」

題しらず

神な月時雨とともにかみなびのもりのこのははふりにこそ

ふれ

○「夕立」「烈敷」

(十九番) 右勝

ゆふだちのはげしかりつる名残かな晴行く軒にのこるしら

露

『拾玉集』第二、一七四三番(百首歌合)

また「私語」は、正徹や正広など、室町期から少数ながら詠まれている語である。

(近恋)

へだつるもうき中がきのささめごとさかじとすれやおくふ  
かくなる  
『草根集』 六九一九番

忍恋

ささめごと人のするにも立ぎきの杜の下露ちる涙かな

『松下集』(正広) 一四〇三番

冒頭の中和門院の歌は、五月雨の空を主題に詠んだものであるが、「時雨」「春雨」「夕立」という、四季折々の雨空を詠み込んでいる。これらの語を中心にして、他の歌語との組み合わせを利用すれば、いかにも組香に仕立てやすいであろう。あるいは、組香の素材とすることを念頭に置いて詠まれた可能性を検討すべきか。

《楽卷一五一》大井川香

【翻刻】

△(朱) 大井川香

新千載集

周防内侍

いにしへも嵐の山の紅葉はの井堰にかゝる色はみさり

き

此哥を種として組侍たるもの也。

一 名乗紙にて聞べし。

一 嵯峨の香、小倉の香、大井川の香、各三包充、都合九包打

交、三結充として、三炷間に三度焚出し、九包皆終て包紙

を開くべし。」楽九五ウ

一 大井川の香斗、外に拵へ試に出す。

一 三炷毎の内に、大井川の香の有無を聞分て認出す。

嵯峨・小倉の香は聞捨也。名乗紙に認る名目、左の如し。

ウ一炷(朱) 嵐の山と書

ウ二炷(朱) もみち葉と書

ウ三炷(朱) 井堰にかゝると書

ウ無(朱) 色は見ざりきと書

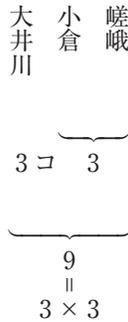
一 記録点は、嵐の山、一点充、もみち葉、二点宛、井堰、三点かくる也。皆中は褒美として聞の下に哥一首を書べし。記録認様、左に出せり。」楽九六オ

大井川香記

〔表〕楽九六ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



\* 本香には、「嵯峨」「小倉」の香(試香なし)と「大井川」の香(試香あり)、各三包計九包を交ぜ、三包ずつ三組にして、三炷聞きを三回行う。九包すべてを焚き終わってから、香の包紙を開き、答えを披露する。

\* 答えは名乗紙に記す。本組香では、試香のある「大井川」の香をウ香とし、三炷中のその数によって、聞きの名目を指定する。すなわち、一炷ならば「嵐の山」、二炷ならば「もみち葉」、三炷すべてならば「井堰にかゝる」、全くない場合は「色は見ざりき」と書く。三炷内において、「大井川」の香が何番目に出たかは考慮されない。なお、「嵯峨」「小倉」の香は聞き捨てとする。

点は、「大井川」の香が出た数により、「嵐の山」(一炷)ならば一点、「もみち葉」(二炷)ならば二点、「井堰にかゝる」(三

姓)ならば三点とし、すべて聞き当てた場合は、褒美として、香之記の最下段、点数を記す欄に、冒頭の歌一首を記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、『新千載集』に載る。

寛治六年十月殿上のをのことも大井河にまかりて紅葉  
見侍りける時、人にかはりてよめる 周防内侍

いにしへも嵐の山の紅葉ばの井せきにかかる色は見ざりき

『新千載集』卷第六冬歌、六二二番

歌句に「大井川」の地名こそ詠み込まれていないが、主題である大井川の紅葉の情景を中心に、組香が仕立てられている。

香名の「嵯峨」「小倉」は、大井川流域、嵐山でも知られる景勝地の名である。嵯峨の地は、「嵯峨野」と呼ばれ、秋の花を愛でたり、前栽を掘ったりする場所であった。また、小倉山・嵐山などを指して「嵯峨の山」と詠むこともある。

大井河

さがの山御幸をうつす大井河紅葉にまがふかり衣かな

『壬二集』一八六四番

また、地名「小倉」には、紅葉を愛でる「小倉山」の歌がある。

(関白左大臣家百首歌よみ侍りけるに)従三位範宗

露しぐれそめはててけりをぐら山けふやちしほの峰のもみ

ち葉

『新勅撰集』卷第五秋歌下、三四七番

このように、大井川を挟んだこの地域は紅葉の名所であるが、本組香では、「嵯峨」「小倉」の香を聞き捨てとし、散り流れた紅葉の葉が井堰に掛かり積もった情景の「大井川」の香を追う趣向になっている。

《楽卷一五二》外山路香

【翻刻】

△(朱)外山路香

拾遺集

源公忠朝臣

行やらて山路くらしつ郭公今一聲の聞まほしさに

此哥によつて組たる也。

一 試なし。

一 名乗紙にて聞くべし。

- 一 山路香三包、郭公香二包、都合五包の内、四包」樂九七オ出香とす。
- 一 山路香一包、郭公香一包取除け、残三包交て焚出す。終て除置たる二包の内より一包取て追加と名付て焚出し、四炷皆聞終て包紙を一同に開くべし。
- 一 始三炷開終て名乗紙に認出す。其後に一包を聞て、又始三炷と聞合て書附出す也。」樂九七ウ
- 一 記録点は、山路・郭公の差別なく、独聞二点、二人より一点宛かくる。追加の一炷聞中たる下に哥を褒美に認るへし。追加は朱にて假名字にて認る也。左のごとし。」樂九八オ

外山路香記 山路除(朱)

〔表〕樂九八ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

$$\begin{array}{r}
 \text{山路} \quad 3 \quad | \quad 1 \quad || \quad 2 \\
 \text{郭公} \quad 2 \quad | \quad 1 \quad || \quad 1 \\
 \hline
 \underbrace{\hspace{1.5cm}}_{3 \dots \text{始}}
 \end{array}
 - 1 = 1 \dots \text{追加}$$

\* 本香には、「山路香」三包、「郭公香」二包(以上、試香なし)、計五包のうち、四包を用いる。すなわち、「山路香」「郭公香」から一包ずつ除き、残り三包を焚いて、その後に、先ほど除いた二包から一包を「追加」と名付けて焚く。四包すべてを焚き終わってから、香包紙をすべて開いて答えを披露する。

答えは、\*名乗紙に記す。「山路香」「郭公香」の区別なく、独り聞きは二点、二人からは一点とする。「追加」の一炷\*を聞き当てた場合は、香之記\*に、冒頭の和歌一首を、朱の仮名で記す。

なお、本組香は「外山路香」と読み、いわゆる「山路香」(志野流では三十組に入る)みとくみのバリエーションのひとつである。他にも、「替かわり(かえ)山路香」「新山路香」がある。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の冒頭に掲げられている歌は、「一声香」(楽巻一二七。『社会科学』第46巻第4号30〜32頁掲載。)と同じく、『拾遺集』の次の歌である。

北宮のもぎの屏風に

源公忠朝臣

行きやらで山ちくらしつほととぎす今ひとこゑのきかまほしさに  
『拾遺集』巻第二夏、一〇六番

組香の焦点は、「一声香」と同じく「今ひとこゑのきかまほしさ」であり、本組香では、最後に「追加」の一炷を設けるという趣向になっている。

《楽巻一五一》新六歌仙香

【翻刻】

△(朱)新六歌仙香

雪月花の六歌仙十八首の和歌をもつて綴待たる組也。

- 一 名乗紙にて聞くべし。
- 一 雪の香、月の香、各六包充、花の香六包別香を用、都合十八包打交て、其内六包出香とす除た十二包は不用。皆焚終て包紙を開べし。
- 一 雪の香、月の香、外に拵へ試に出す。花の香は客香」樂九九

オなる故に試なし。

一 六炷間終て名乗紙に認出す。其名目左のごとし。

雪香(朱)

一番(朱) かつらき山 二番(朱) 我跡つけて

三番(朱) 峯のまさがき 四番(朱) 谷の細道

五番(朱) 軒端の杖 六番(朱) 尾上の鹿

月香(朱)

一番(朱) 外山の庵 二番(朱) 塩かま

三番(朱) 水のしら玉 四番(朱) 天の原

五番(朱) 秋の半 六番(朱) 明かたの空

花香(朱)

一番(朱) かゝる桜 二番(朱) 春の心

三番(朱) 春の曙 四番(朱) 山の端こと

五番(朱) あし引の山 六番(朱) 三芳野、山」樂九九ウ

一 記録点は、地香独聞二点、二人より一点充、客香独聞三点、

二人より二点充かくるべし。

へ(朱)新六歌仙引哥

後京極撰政前太政大臣

雪(朱) 新勅撰集 しもといふかつらき山のいかならむ都も雪は間なく時

なし

月(朱) 新古今集 深からぬ外山の庵の寝覚たにさそな木の間の月は淋し  
き

花(朱) 新勅撰集 昔たれかゝる桜の花をうへて吉野を春の山となしけ  
む一〇〇オ

前大僧正慈圓

雪(朱) 新古今集 庭の雪に我跡つけて出つるをとはれにけりと人や見る  
らん

月(朱) 新古今集 更ゆかは煙もあらし塩かまの恨なはてそ秋の夜の月

花(朱) 風雅集 春の心長閑しとても何かせん絶て桜のなき世なりせは  
皇太后宮大夫俊成

雪(朱) 新古今集 雪ふれは峯のまさかき埋れて月にみがける天のかく山

月(朱) 千載集 石はしる水の白玉数見へて清瀧川にすめる月かけ一〇ウ

花(朱) 新古今集 又や見んかた野、み野、桜狩花の雪ちる春の曙  
西行法師

雪(朱) 山家集 中／＼に谷の細道埋め雪有とて人の通ふべきかは

月(朱) 續後撰集 天の原同じ岩戸を出れとも光りことなる秋の夜の月

花(朱) 千載集 をしなへて花の盛に成にけり山の端ごとにかゝる白雲  
権中納言定家

雪(朱) 新古今集 待人の禁の道は絶ぬらん軒端の杵に雪おもるなり一〇一オ

月(朱) 新勅撰集 あけば又秋の半も過ぬべしかたふく月のおしきのみか  
は

花(朱) 拾遺愚草 あし引の山桜戸をまにに明て花こそあるし誰をまつら  
ん

従二位家隆

雪（朱）<sup>六家集</sup> 高砂の尾上の鹿のなかぬ日もつもり果たる松の白雪

月（朱）<sup>新古今集</sup> 詠めつ、思ふもさびし久堅の月の都の明かたの空

花（朱）<sup>新勅撰集</sup> けふ見れば雲も桜も埋れて霞かねたる三芳野、山

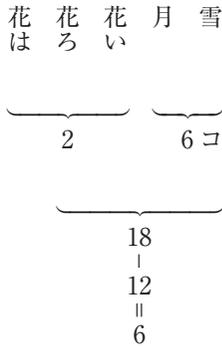
一 記録認様左のごとし。 <sup>案一〇二ウ</sup>

新六歌仙香之記  
雪 四炷（朱）  
月 三炷（朱）  
花 五炷（朱）  
除（朱）

〔表〕 案一〇二オ

【考察】

（1）竹幽本組香の方法



\* 本香には、地香「雪」「月」の香（試香あり）を六包ずつ、客香「花」の香（試香なし）を二包ずつ三種類の別香で全六包、計十八包を交ぜ、その中から六包を用いる。残りの十二包は用い

ない。

六包すべてを焼き終わってから、名乗紙に答えとして、以下の聞きの名目を記す。すなわち、「雪」の香が出た場合、何炷目に出たかによって、一炷目以下順に、「かつらき山」「我跡つけて」「峯のまさがき」「谷の細道」「軒端の杵」「尾上の鹿」「月の香では、「外山の庵」「塩かま」「水のしら玉」「天の原」「秋の半」「明かたの空」、「花」の香は、「かゝる桜」「春の心」「春の曙」「山の端ごと」「あし引の山」「三芳野、山」と書く。

点は、地香の独り聞き二点、二人以上は一点とし、客香は独り聞き三点、二人以上は二点である。

なお、冒頭の構造式において、三種類の「花」の香を「花い」「花ろ」「花は」と私に示した。これは、仮に「花一」「花二」「花三」とした場合、御家流では「花一」には佐曾羅、「花二」には寸門陀羅、「花三」には新伽羅を用いるという決まりがあり、また、十炷香札に「花一」「花二」「花三」があることから、それらの意と明確に区別するためである。

（2）和歌作品との関わり

本組香では、聞きの名目のもととなった和歌とその出典が、「新六歌仙引哥」として列挙される。これを手掛かりに、以下、それらの和歌の題や詞書、歌番号などを、『新編国歌大観』に照

らして確認する。

▽後京極摂政前太政大臣

雪…冬歌とてよみ侍りける（新勅撰集・卷第六冬・四二二番・

後京極摂政前太政大臣）

月…八月十五夜和歌所歌合に、深山月といふ事を（新古今集・

卷第四秋上・三九五番・摂政太政大臣）

花…家に花五十首歌よませ侍りける時（新勅撰集・卷第一春上・

五八番・後京極摂政前太政大臣）

▽前大僧正慈円

雪…題しらず（新古今集・卷第六冬・六七九番・前大僧正慈円）

月…百首歌たてまつりし時（新古今集・卷第四秋上・三九〇番・

前大僧正慈円）

花…千五百首歌合に（風雅集・卷第三春下・二一四番・前大僧

正慈鎮）

▽皇太后宮大夫俊成

雪…守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに（新古今集・卷第

六冬・六七七番・皇太后宮大夫俊成）

月…百首歌めしける時、月のうたとてよませ給うける（千載集・

卷第四秋上・二八四番・皇太后宮大夫俊成）

花…摂政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに（新古今集・卷

第二春下・一一四番・皇太后宮大夫俊成）

▽西行法師

雪…ゆきのふりけるに（山家集・一三六五番）

月…月の歌の中に（続後撰集・卷第六秋中・三三三番・西行法

師）

花…花歌とてよめる（千載集・卷第一春上・六九番・円位法師）

▽権中納言定家

雪…摂政太政大臣、大納言に侍りける時、山家雪といふことを

よませ侍りけるに（新古今集・卷第六冬・六七二番・定家

朝臣）

月…後京極摂政、左大将に侍りける時、月五十首歌よみ侍りけ

るによめる（新勅撰集・卷第四秋上・二六一番・権中納言

定家）

花…山花（拾遺愚草・中・二〇一六番・仁和寺宮五十首）

▽従二位家隆

雪…松雪（壬二集・一七七六番・道助法親王家五十首・第四句

「つもりはてぬる」

月・題しらず（新古今集・卷第四秋上・三九二番・家隆朝臣）  
花・千五百番歌合に（新勅撰集・卷第一春上・七二番・正三位  
家隆・第二句「雲もさくらに」）

組香を仕立てる際に、少なからぬこれらの歌を、勅撰集や私家集から直接集めてきたとは、やはり考えにくいであろう。あるいは、「新六歌仙」の秀歌撰の類に依拠したか、類題集からの抜粋か。

《射巻―》 深山香

【翻刻】

△（朱）深山香

新題林集

實岑

奥ふかく入もて行は柰杓の中に色こき嶺のみみち葉  
此哥によりて組たる香也。

一 麓の香三包、松の香三包、杉の香三包、紅葉の香一包、聞香とす。麓の香斗外に包て試に出す。柰・杓・紅葉の香は試なし。」射三才

一 麓の香三包、柰の香一包、杓の香一包、都合五包打交て結ひ合置、始に焚出也。又、松の香二包、杉の香二包、紅葉

の香一包、都合五包打交て結び合せ置、末に焚出也。

一 初五包結合る時に、柰を初とし、杉を後に成よふに麓三包の内に交て、紛ざる様に組合置べし。後五包は、五炷ともに前後の差別なく打交て結合てよし。」射三ウ

一 麓の香、試過て始五包を焚出し、聞終りて記録筆記し、包紙を開く。点をかくる也。扱て後五包を焚出し、是又聞終りて記録筆記して後に、包紙を開くべし。

一 札は十炷香の札を用ゆ。打様左のことし。

麓の香に 一の札

柰の香に 二の札射四才

杓の香に 三の札 如此打べし

紅葉の香に ウの札

一 始五包の内に、試なき香と聞は、柰の札を打、次に試なき香と聞は、杉の札を打べし。

一 後五包の内、試なき香には、紅葉の札を打べし。柰・杉の香は、始五包出たる時に、聞覚へて居るべし。

一 記録点の認様は、麓の独聞二点、二人より一点也。柰杓射四ウ独聞三点、二人より二点也。紅葉独聞四点、二人よりは三点なり。

一 柰の香、杓の香、初五包の内に出たるを聞はづし、後五包の内にて一炷聞當は一点、二炷共に聞中は二炷目は二点也。

「独聞の差別なし。記録認様左のごとし。」射五オ

深山香之記

「表」射五ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法

麓	コ	始	末
3    3			
松	3    1 + 2		
	初		
杉	3    1 + 2		
	後		
紅葉	1	1	

\* 本香には、「麓」の香（試香あり）三包、「松」「杉」の香（試香なし）各三包、「紅葉」の香（試香なし）一包の計十包を用いる。

まず、「麓」の香三包と「松」「杉」の香各一包の計五包を交ぜ、「始」の段として焚く。その後、残りの「松」「杉」の香各二包と「紅葉」の香一包の計五包を「末」の段として焚き出す。ただし、「始」の段では、「松」の香が「杉」の香の前にくるようにして、「麓」の香三包の中に交ぜる。一方、「末」の段では、五炷すべてにおいて、前後関係は問わない。

「麓」の香の試香が終わってから、本香の「始」の段、五炷を

焚き、その都度、十炷香札を打ち、答えを記録する。試香のある「麓」の香には「一」の札を打つが、「松」「杉」の香には試香がなく、区別できないため、聞き覚えのない香が出た際、出香の順に「二」「三」の札を打っていく。「始」の段を聞き終わり、答えを記録し終わった時点で香包紙を開き、正答を披露して得点を記す。

「始」の段で「松」「杉」の香を聞き覚えておき、「末」の段に入る。「紅葉」の香一炷は、試香がなく、また、「始」の段で聞き覚えのない香であることから判断できる。「ウ」の札を打つ。点は、「麓」の香の独り聞き二点、二人以上は一点である。また、「松」「杉」の独り聞きは三点、二人以上は二点とする。最も得点が高い「紅葉」の香は、独り聞き四点、二人以上は三点である。ただし、「始」の段、「末」の段とも出る「松」「杉」の香については、「始」の段で聞き外した場合、「末」の段でそれぞれの香を聞き当てた数が一炷の場合一点、二炷とも聞き当てた場合の二炷目は二点とする。独り聞きの違いはない。

(2) 和歌作品との関わり

本組香冒頭の和歌は、『新題林集』（正徳七年（一七一六）刊）に載る、「山中紅葉」と題する二首の和歌のうちの一首である。

山中紅葉

山ふかくわけてそみつる里にてはそめもつくさぬ木々の時  
雨を  
通茂

おくふかく入もてゆけは松杣の中にいろこき峯のみち

實岑

『新題林集』卷第八秋哥下、二十四丁表

(八戸市立図書館蔵本。国文学研究資料館

マイクロフィルム影印に拠る。)

「麓」の香よりも「松」「杉」の香、さらに「紅葉」の香と、聞き当てたときの点が高く設定されているのは、山を麓から奥深く分け入り、常緑の松や杉を見ながら、その先に美しい紅葉を見出すという寓意であろう。

なお、作者の「實岑」は、押小路実岑(延宝七年(一六七九)四月二十五日生、寛延三年(一七五〇)二月十一日没)。権大納言。権大納言公音男。母は権大納言河鰭実陳女。

《射巻―三》 宇治拾遺香

【翻刻】

△(朱) 宇治拾遺香

宇治山香終りて後に、其残四包を春夏秋冬と號け、外に

別香四包を補・客と號て加へ、都合八包として後、興を催す式なり。

一 十炷香の札を用。

一 春夏秋冬各一包、補の香三包、客香一包、都合八包聞香と

す春夏秋冬の試に出す。補・客の二香は試なし。」射八才

一 香銘定様は

(朱) 出香	(朱) 春	(朱) 夏	(朱) 秋	(朱) 冬
我庵は	都の辰巳	鹿ぞすむ	世を宇治 山と	人はいふ なり
都の辰巳	我庵は	鹿ぞすむ	世を宇治 山と	人はいふ なり
鹿ぞすむ	我庵は	都の辰巳	世を宇治 山と	人はいふ なり
世を宇治 山と	我庵は	都の辰巳	鹿ぞすむ	人はいふ なり
人はいふ 也	我庵は	都の辰巳	鹿ぞすむ	世を宇治 山と

― 射八ウ

若又宇治山香なしに直に拾遺香斗りを催時は、四季の香を二包充拵へ、其内四季ともに一包充取て試に出すべし。

一 春札一、夏札二、秋札三、冬札ウの、補客に花三三の札打べし。補・客

の香には無試十炷香の通に札をうつ也。始に出たる無試香には、極て花一の札を打べし。夫故に先補後客と出れば、月

札二枚残る。又先客後補一射九オと出れば、花の札二枚残る也。補・客の二香は無試故に左の通也。

補花一 客月一 補花二 補花三 月二枚残る

客花一 補月一 補月二 補月三 花二枚残る

大概右の通に打、併客香の順は極がたし。

一 香皆焚終りて香包を開くべし。記録点は、客二点、地香一

点充なり。各独聞の差別なし。春夏秋一射九ウ冬の香を補、

客の香と聞たるは星一つ宛なり。

一 記録の下に

喜撰 皆中 田夫 無

哥人 宇治山香に不中、愛にて中なるに香 旧跡 宇治山香に中、愛にて不中なるに香

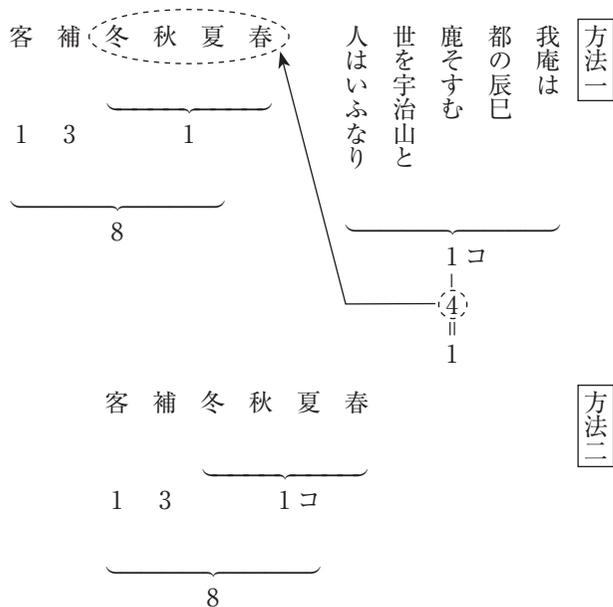
と認べし。記録左に記す。一射一〇オ

宇治拾遺香之記

〔表〕射一〇ウ

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本組香は、宇治山香の後に行く。宇治山香は、「我庵は」「都の辰巳」「鹿ぞすむ」「世を宇治山と」「人はいふなり」の香（以上、<sup>\*</sup>試香あり）、各一包計五包から一包を選び焚き出すというものである。宇治山香で用いなかった残り四包を、あらためて「春」「夏」「秋」「冬」の香（別に試香を行う）と名付け、その他に別香二種四包を「補」の香（三包）と「客」の香（一包）

と称して加え（以上、試香なし）、計八包を出香とする。

宇治山香をせずに直接、本組香（拾遺香）だけを行う時は、四季の香各二包計八包を用意して、各香一包ずつを試香とし、残りの四包を、前述の方法同様、「補」の香（三包）と「客」の香（一包）に加えて用いる。

答えには、十炷香札を用いる。四季の香には、順に「一」「二」「三」「ウ」の札を打つ。また、「補」「客」の香は、試香がなく区別できないため、無試十炷香の要領で、「花一」「花二」「花三」「月一」「月二」「月三」の札を打ち分ける。ちなみに、三炷ある「補」の香が先に出た場合は、「月」の札二枚が残り、一炷しかない「客」の香が先の時には、「花」の札が二枚残る。

香をすべて焚き終わってから香包紙を開いて正答を披露する。点は、客香を聞き当てると二点、それ以外の地香は一点である。独り聞きの区別はない。四季の香を「補」や「客」の香と聞き違えると、星ひとつを付す。

香之記の最下段には、すべて聞き当てた場合は「喜撰」、すべて聞き違えた場合は「田夫」、宇治山香で聞き違え、本組香で聞き当てた場合は「哥人」、逆に宇治山香で聞き当て、本組香で聞き違えた場合は「旧跡」と記す。

(2) 和歌作品との関わり

本組香の主題は、『百人一首』にも採られた喜撰法師の次の歌である。

(題しらず)

きせんほうし

わがいはほは宮このたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふ  
なり 『古今集』 卷第十八雑歌下、九八三番

喜撰法師については、『古今集』仮名序の六歌仙評に、「宇治山のそうきせんはことばかすかにしてはじめをはりたしかならず、いはば秋の月を見るにあかつきのくもにあへるがごとし」と記されることも周知のとおりである。

すべて聞き違えたときに香之記に記す「田夫」（農夫。転じて、無風流な者。）の語は、同じ六歌仙のひとり、大伴黒主について述べた『古今集』真名序の一節に、「大友黒主之歌古猿丸大夫之次也頗有逸興而体甚鄙如田夫之息花前也」と見える。

また、「旧跡」の語は、喜撰が住んでいたという喜撰山（嶽）を指すのであろう。『山城名勝志』（正徳元年（一七一〇）刊）卷第十七宇治郡部でも「宇治山」の後に「喜撰嶽」の項目を立て、「宇治山の喜撰か住ける跡あり」（長明無名抄）と引用した上で、「喜撰ノ旧跡」の位置を詳述する。喜撰のかつての住まい

が「家はなけれど」（『山城名勝志』所引「長明無名抄」という旧跡になってしまったことを、宇治山香で香を聞き当て、本組香で聞き違えるという状況に重ねるといふ趣向であろう。

附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも二〇一六～二〇一八年度）における研究の一部である。



月	名糸	名糸	名糸	名糸	名糸	本	鼻月香 絶 三 除
	一	一	一	一	一	一	
	一	二	二	二	二	二	
	二	二	二	二	二	二	
	三	二	二	二	二	二	
	表雨	五月雨	夕之	香西	晴雨	二	
	くしの加	志ら水の雨	烈 菱	むの香	布糸障		

(楽・九三丁裏)

(楽・九三丁表)

五月雨中 引く炭炭 時雨中 積衣  
 春雨中 花の香 夕之中 薰風  
 一 三 点 の 調 子 で 流 入  
 五月の外 志ら水 内 外 石 糸 障  
 五月の外 秋 夜 夕 立 外 烈 菱  
 龍 源 湯 瓶 次 へ 願 入

大井川香 因 内 作  
 新 子 刺 集  
 小 川 へ 毛 炭 の 山 水 紅 糸 の  
 井 堰 へ 引 け 糸 文 と 糸 文  
 一 名 糸 紙 を 用 け  
 一 暗 燻 の 香 小 倉 の 香 大 井 川 の 香 各 色 包 元 紙 合  
 九 包 折 交 之 緒 元 と 之 之 故 用 小 之 夜 替 出  
 九 包 皆 紙 包 紙 と 用 之

(楽・九五丁裏)

(樂・九六丁表)

一 大井川の香汁外箱(城紙)  
 一 二枚紙の内小大井川の香の巻を二周分を二枚紙  
 船紙小合の香紙は名香紙は酒名月左の紙

ウ一柱 嵐の山香 ウ二柱 小嵐の山香  
 ウ三柱 井堰の山香 ウ四 色紙の山香

一 龍源点六嵐の山一色丸小嵐二色丸井堰と点  
 二色丸皆中々慶典として國の下より一月以  
 上言一 龍源酒廠(たし)出

大井川香祀

名葉	名葉	名葉	名葉	名葉	本
とみり葉	とみり葉	とみり葉	とみり葉	とみり葉	とみり葉
山嵐の山	山嵐の山	山嵐の山	山嵐の山	山嵐の山	山嵐の山
二点	一点	一点	一点	一点	一点

(樂九六丁裏)

(樂・九七丁表)

外山路香

拾遺集  
 必中して山路香一紙紙  
 今一色丸の山香紙は小

一 山路香一色丸郭公香一色丸藤若紙之色交換  
 出尺紙に陸直二色の内より一色丸を追加  
 名香紙は四柱皆風紙一色紙と一色丸  
 同く

一 始之始國紙名香紙小池紙其後一色丸  
 同く又始之始國合て書出尺紙也

(樂・九七丁裏)

外山詣香籠

山詣除

名糸	山詣	時鳥	山詣	時鳥	山詣
名糸	山詣	山詣	時鳥	山詣	時鳥
名糸	山詣	山詣	山詣	山詣	山詣
名糸	山詣	山詣	山詣	山詣	山詣
名糸	山詣	山詣	山詣	山詣	山詣
名糸	山詣	山詣	山詣	山詣	山詣

遊如

一 龍源寺より山詣郭のむすむすに独園にて  
二人の一人龍源寺の連加の一般風中より  
と慶芳の徳氣へ一連加の香をて徳源寺を  
徳源寺のたのむ

(楽・九八丁裏)

(楽・九八丁表)

新二款仙香

香月花の二款仙十八首の和歌より  
はるかに組

一名糸紙をて風

一 香の香月の香各二色 元花の香二色 二色は龍源寺  
初香と龍源寺

一 香の香月の香外二色 龍源寺三  
色は龍源寺

一 香の香月の香外二色 徳源寺三  
色は徳源寺

一 香の香月の香外二色 徳源寺三  
色は徳源寺

一 二款仙香 名糸紙の徳源寺其名月花の  
一 香 龍源寺山 二香 我師つけて 三香 花の香二色  
四香 谷の細通 五香 郭源の枚 六香 尾との香

一 香 外山詣 二香 徳源寺 三香 鳥の香  
四香 天の香 五香 秋の香 六香 明の香

一 香 香月花 二香 香の心 三香 香の陽  
四香 山の香 五香 香の山 六香 香の山

(楽・九九丁裏)

(楽・九九丁表)

一紀源点々地音性閑二点二人一良気音音性  
 之点二人一良気音音性

新六歌仙引奇

後鳥羽院御歌集

雷

新古今集

月

新古今集

花

茶大僧正意圖

雷

新古今集

月

新古今集

花

白土麻呂意圖

雷

新古今集

月

新古今集

(樂・一〇〇丁裏)

(樂・一〇〇丁表)

花

新古今集

雷

山家集

月

千載集

花

新古今集

雷

新古今集

月

拾遺草

花

新古今集

雷

新古今集

月

新古今集

花

新古今集

雷

新古今集

月

新古今集

(樂・一〇一丁裏)

(樂・一〇一丁表)

新二款仙香一籠

名糸	名糸	名糸	名糸	名糸	本
月	月	月	月	月	月
雪	雪	雪	雪	雪	雪
花	花	花	花	花	花
雪	雪	雪	雪	雪	雪
月	月	月	月	月	月
月	月	月	月	月	月
二点	二点	二点	二点	二点	二点

常四枝  
月二枝  
花五枝  
除

(樂・一〇二丁表)

深山香

新題 實本

奥物 入りしりし松の香

中 小池の石炭よりみらる

正 奇小りの細る香

一 蘇の香 二 色松の香 三 色杉の香 四 色紅葉の香

一 色岡の香 二 色麓の香 三 外小池の香 四 誠小池の香

一 松の香 二 色松の香 三 色杉の香 四 色紅葉の香

一 色岡の香 二 色麓の香 三 外小池の香 四 誠小池の香

一 初也色松の香 二 時小池の香 三 杉の香 四 小池の香

一 松の香 二 色松の香 三 色杉の香 四 色紅葉の香

一 色岡の香 二 色麓の香 三 外小池の香 四 誠小池の香

(射・三丁裏)

一 麝の香試して始末色を禁出く園修く龍藻  
 筆札一色紙で園く点紙は心も細く後末色で  
 禁出く是又園修く龍藻筆札一後末色紙  
 さらすべし

一 札は中散香の札より由寺梅丸のり

禁葉の香小 一の札  
 香の香小 二の札

木の香小 一の札 如母寺へ

紅葉の香小 ウの札

一 始末色の内小試み散香く園の香札より寺次小試  
 みる香く園の札とすべし

一 後末色の内試み散香く紅葉の札とすべし香枝  
 の香は始末色也時小園は寺へ唐へ

一 龍藻点の認極く禁葉の種より二点二人つらこ香枝

(射・四丁表)

(射・四丁裏)

深山香之祀

一 香の香枝の香初末色の内小出くは園修く後  
 末色の内小一版園當り二点二版小園中き  
 二版目より二点一版園の香別か 龍藻認極  
 左記

一 種より二点二人より二点也紅葉種より四点二人  
 より二点也

本	木	初	香	白	杜	若
生	生	極	柳	皮	若	竹
松	松	松	松	松	松	松
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
麝	麝	麝	麝	麝	麝	麝
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
香	香	香	香	香	香	香
松	松	松	松	松	松	松
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
麝	麝	麝	麝	麝	麝	麝
香	香	香	香	香	香	香
松	松	松	松	松	松	松
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
麝	麝	麝	麝	麝	麝	麝
香	香	香	香	香	香	香
松	松	松	松	松	松	松
七	七	七	七	七	七	七
点	点	点	点	点	点	点

辛酉月

(射・五丁表)

(射・五丁裏)

〔中治拾遺香〕

中治山香は、後小其幾四色と春菱秋を、  
辨宮外小別音四色と補宮と辨宮加切合  
八色とて後具と儼と云ふ

一十姓香の札と用

一春菱秋を各一色補の香之色皆香一色切合色圍香  
と云ふ春菱秋中の補宮の二香を識か

	<b>出</b>	<b>春</b>							
我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵
都庵	都庵	都庵	都庵	都庵	都庵	都庵	都庵	都庵	都庵
我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵	我庵
切合	切合	切合	切合	切合	切合	切合	切合	切合	切合
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春
秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋	秋
冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬	冬

〔香浴定極〕

(射・八丁裏)

(射・八丁裏)

(射・八丁表)

若又中治山香は、小直小拾遺香斗り、  
附四色香は二色先極(其内四色より小一色  
先取て試み出下)

一春札の菱の秋の冬札の補宮、  
一補宮の香より菱十散香の通小札より、  
始小別り、菱香より極く花の札は、  
先補後宮と出小月札二枚抄、  
又又宮後補

と出小花の札二枚抄、  
補宮の二香は菱  
花より通也

補 花一 月一 補 花二 月二 枚抄  
宮 花一 補 月一 補 月二 花二 枚抄

大概右通小少係各香の順と極く

一香皆無法とて香也と聞くと、  
龍踏点と宮二点  
地香一と先より、  
香徳年の別り、  
春菱秋

(射・九丁裏)

(射・九丁裏)

(射・九丁表)

宇治拾遺香記

	本補	夏	冬	補	密	秋	春	補
名宗	初梅	花一	夏	冬	月	花一	秋	春
名宗	青柳	花一	夏	冬	月	花一	秋	春
名宗	白菫	花一	夏	冬	月	花一	秋	春
名宗	杜若	花一	夏	冬	月	花一	秋	春
名宗	若竹	花一	夏	冬	月	花一	秋	春
月		秋	夏	冬	補	密	秋	春
日		星一						

一龍潭のり小

森標 密中 回文 無

音人 宇治拾遺香記中  
香のり中書

旧跡 宇治拾遺香記中  
香のり中書

と徳一 龍潭左小龍記

冬の香を補密の香く聞ふは星一と苑なり

(射・一〇丁裏)

(射・一〇丁表)